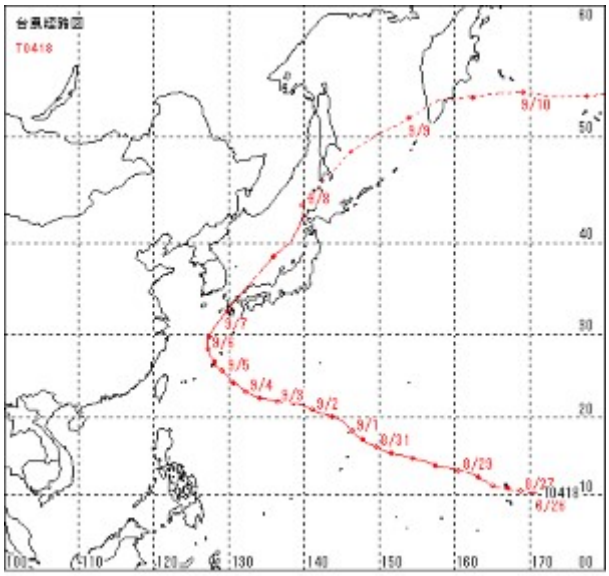
平成１６年９月台風

平成16(2004)年9月4日～8日

■気象の概況

８月２８日にマーシャル諸島近海で発生した台風第１８号は、日本の南海上を北西に進み、９月５日に大型で非常に強い勢力で沖縄本島北部を通過しました。その後、東シナ海を北上して進路を北東に変え、７日９時半頃、長崎市付近に上陸して九州北部を横断。７日午後には山陰沖に達し、日本海を加速しながら北東に進みました。この台風は暴風域を伴ったまま８日朝には北海道西海上を北上し、温帯低気圧となりました。

記録的な強風で日本列島を駆け抜け、広島で最大瞬間風速６０・２メートル、札幌で５０・２メートルを記録したのをはじめ、沖縄地方、九州地方、中国地方、北海道地方では過去の記録を更新する猛烈な風を観測しました。また、九州地方の一部で９００ミリを超える大雨を観測した所がありました。加えて瀬戸内海沿岸、西日本から北日本にかけての日本海側沿岸などを高潮が襲いました。



＜台風の進路図（気象庁ホームページから）＞

この台風により、建物の損壊や倒木被害が各地で発生し、転倒や飛散物の落下により多くの人が負傷しました。西日本では船舶の事故が相次いで発生したことも大きな特徴です。

トピック

■外国船舶の相次ぐ被害

２００４年９月８日付の中国新聞朝刊社会面は「荒波２隻のみ込む　台風１８号／廿日市・下松沖暴風、救出阻む」の大見出しを掲げています。広島県廿日市市の木材港でカンボジア船籍の木材運搬船が沈没、下松市笠戸島沖ではインドネシア船籍の貨物船が座礁し沈没。いずれも外国人乗組員に死者が出ています。

このうち廿日市の事故は船をロープで岸壁につないでいる時に起きました。本来なら大型台風の接近時は沖合に停泊すべきですが、広島海上保安部の指導にもかかわらず従わなかった船長の判断が原因とみられています。

笠戸島に建つインドネシア船籍貨物船の遭難碑

（個人撮影）

また、笠戸島沖の事故の場合は貨物船が沖合で停泊するルールは守っていたものの、停泊方法が不十分だったのか、強風で流されて座礁したとみられます。２２人の死者・行方不明者を悼んで地元自治会などが翌年、慰霊碑を島内に建立し、事故の再発防止と日本・インドネシアの友好促進を願う、としています。

トピック

■厳島神社の被災

広島県宮島町（現廿日市市）の厳島神社（世界文化遺産）は予想を超える強風や高潮のために回廊のほか国宝・平舞台なども損害を受けました。過去にも風水害の被害を何度も受けてきましたが、それをしのぐ規模でした。同神社禰宜の飯田楯明氏は国土交通省のインタビューで「当日は満潮でも潮位が２・７６メートルと低かったのですが、実際には潮位が１・７メートルも膨らみ、回廊の床上５０センチにも達して、そこに強風と高潮が襲ってきました。今まであまり例がないことですね。床板（平舞台）は動いて破損しました。ただ、この部分には消波的な効果もあるようです。左楽房は破損してばらばらになり、右楽房は人力で綱を引いて流されるのを止めました。全３７棟のうち破損は３０棟にも及びます」と語っています。１９９１年の台風１９号よりひどい、という声も聞かれました。

集落の道路が砂で埋まった東和町
（現在は周防大島町）外入地区（個人撮影）

広島県内ではこのほかにも文化財に被害が出ました。広島市内では不動院金堂の屋根の一部が壊れ、縮景園では茶室などがある建物の屋根材の一部が剥がれました。広島県千代田町（現北広島町）では国重要文化財「木造薬師如来像及両脇侍像」など１２体の収蔵庫に杉の木が倒れて雨が吹き込み、加計町（現北広島町）の県名勝吉水園でも被害が出ました。尾道市の国重文、浄土寺の裏門軒の瓦も落下。安芸高田市や三次市では県天然記念物のエノキやセンダンが根元から折れました（中国新聞９月８日付朝刊）

トピック

■周防大島の高潮被害

山口県周防大島では伊予灘沿岸部に特に大きい被害が出ました。橘町（現在は周防大島町）西安下庄では９月７日昼過ぎ、大島中部病院南側の防波堤が決壊し、駐車場の車約６０台が隣接する安下庄高校グラウンドまで数１００メートルにわたって押し流されました。車が車の上に積み重なりました。海水は中部病院など一帯に流入し、安下庄漁協の村田岩治組合長は「5 人で事務所のドアを押さえたが、勢いにかなわず 2 階に避難した。波じゃない。潮が膝まで来た」と話しています。東和町（現在は周防大島町）外入では砂が波とともに防波堤を超えて流入し、８日朝は県道や集落の路地が砂で埋まって住民が手作業や重機で復旧作業に入っていました。屋根や瓦が飛んだ家も多く、車庫が倒壊して更地になった一角もありました。（中国新聞９月９日付朝刊）。